

# マリン&レクリエーション実習のプログラム評価に関する研究

ープログラムの差異による自己概念の変容に焦点を当ててー

井澤 悠樹・松永 敬子\*

## **Study about program evaluation of marine & recreation program: focus on transfiguration of the self-concept by the difference of program**

Yuki Izawa, Keiko Matsunaga\*

### 抄 録

本研究の目的は、プログラムの差異による自己概念の変容に焦点を当てることで、マリン&レクリエーション実習のプログラム評価を行い、2泊3日から3泊4日へ変更したことについての評価を行うことである。

データは、過去5年間でマリン&レクリエーション実習に参加した学生が回答した質問紙を用いた。それぞれ事前調査・事後調査の2回の質問紙調査に参加学生137名に対して行い、事前調査・事後調査共に124部(90.5%)の有効回答を得た。また、実習の振り返りを自由記述で求めた。

結果として、学生の自己概念の値は、2泊3日より3泊4日の方が有意に高く、かつ、マリン&レクリエーション実習を経験後に有意な向上を示すことが明らかとなった。

**キーワード：**プログラム評価、自己概念、プログラムの差異

(2013年9月30日受理)

### **Abstract**

The purpose of this study was to evaluate the Marine & Recreation program change from two to three night stays, by examining the transfiguration of the students' self-concept by the difference of program.

The data used the questionnaire that the student who had participated in the Marine & Recreation program of five years in the past had answered. Research was given twice, pre-test and post-test, to 134 students who had participated in the Marine & Recreation program. Both tests provide 90.5% of usable data. In addition, post-test requested students to reflect on the Marine & Recreation program through free writing.

---

\*龍谷大学

As a result, three night stays of a measurement value of student's self-concept were significantly higher than two night stays. In addition, the students' self-concept was significantly increased by having experienced a marine program.

**Key words:** program evaluation, self-concept, difference of program

(Received September 30, 2013)

## 1. 諸言

これまで筆者らは、本学で開講されている身体活動2集中授業「マリン&レクリエーション実習（マリン in 余島。以下、マリン）」のプログラム評価について報告してきた（井澤・松永，2009；2010；2011；2012）。その中で、マリンでの経験を経ることで学生の心理的要因（自己効力感や自己概念）が向上することを示唆してきた。つまり、非日常的な環境下において他者と協力して課題解決に臨むことで、達成感による自信の獲得やその過程における自己・他者への気づきを感じており、心理的变化を獲得するに至っていたと結論づけていた。しかしながらこれまでの報告では、マリンを経験することで学生の心理的要因は向上するものの、統計的に有意な向上を示していたわけではなく、その要因の1つとして、プログラム日程とそれに伴うプログラム内容を指摘してきた。

これまでのマリンは2泊3日で開講されていたが、初日の午後に実習地入りし、3日目の正午には帰路につくことを考えれば、実質的な活動時間は非常に少なく、プログラムで得られる気づきが、定量的分析における有意な変化を示すまでには至っていないと考察してきた。そこで、2012年度よりカリキュラムの改定に伴い、2泊3日から3泊4日へ変更したことで時間の確保とプログラムの更なる充実を図った。

昨年度の報告（井澤・松永，2012）においては、3泊4日のマリンを経験することで参加学生の自己概念が統計的に有意な向上を示すことを報告した。その中で、統計的に有意な向上に影響した要因として、これまでの報告と比較して異なる点である、1) 2泊3日から3泊4日への変更、2) プログラム内容の変更を示唆した。先行研究（影山・飯田，1988；橋・平野・関根，2003）においても、対象者の心理的な変化に影響する要因としてプログラム期間やプログラム内容の差異が指摘されていることから、1泊の違いは大きく影響していたと考えられる。しかしながら、昨年度のマリンが2泊3日から3泊4日へ変更して1回目であったことを考えると、2012年度の参加学生が、過去の参加学生よりも特別に高いモチベーションを持ってマリンに参加していたことで、統計的に有意な向上が認められた可能性も否定できない。言い換えれば、マリンの日程を1泊増やしたことに對する評価を行うならば、3泊4日に変更して2回目となる2013年度の参加学生も含め、これまでの2泊3日の参加学生と比較することで、3泊4日の有意性を明らかにすることが必要であると考えた。

そこで本研究では、マリンを2泊3日から3泊4日へ変更したことが学生にとってより

良い変化をもたらすことができているのかを明らかにする為、今年度のマリンを含めた過去5年間にマリンを履修した学生のデータを用いて、プログラムの差異と自己概念の変容に焦点を当てて比較検討を行う。

## 2. 目的

本研究の目的は、プログラムの差異による自己概念の変容に焦点を当てることでマリンのプログラム評価を行い、2泊3日から3泊4日へ変更したことについての評価を行うことである。

## 3. 用語の定義

プログラム (program) は「計画・予定・行事計画。」などと翻訳される (小学館, 1984)。また、プログラムの意味は「予定。計画表。スケジュール。」(小学館, 1988)、「ある物事の進行状態についての計画や予定。予定表。」(小学館, 1995) と記されている。そこで、本研究において用いる「プログラム」とは、「マリンで行われる一連の計画内容およびその予定」と定義した。

自己概念とは、「自分について持っている知識やイメージの総称 (上瀬, 2000)」であり、自分自身を主観的に捉えた「自分から見つめた自分 (影山・布目, 2001)」とされている。つまり、自己概念の変容を明らかにすることは「自分について持っているイメージ」や「『自分から見つめた自分』の認識」の変容を明らかにすることであり、そこには自身の新たな側面の発見や再認識も含まれる。そこで、本研究において用いる自己概念の変容を「自己に対する気づきの獲得」と操作的に定義する。

## 4. 研究方法

### 4.1 マリン&レクリエーション実習の概要

表1は、2泊3日・3泊4日それぞれのマリンの概要を示したものである。主な違いとして、1) プログラム期間、2) プログラム内容、3) 学生によるプログラム内容の決定、が挙げられる。2泊3日では、筆者らが設定したプログラムを行っていたが、3泊4日においては、初日のキャンプファイヤー (ボンファイヤー) と2日目のバーベキューは、事前ガイダンスにおいて学生が主体となって実施するか否かを決めている。

### 4.2 データ収集

過去5年間 (2009年～2013年) のマリン参加者に行ってきた質問紙調査で得られたデータを用いる。分析の視点をプログラムの差異に設定することから、2泊3日で開講された2009年～2011年の参加者を old program group (以下、OPG)、3泊4日で開講された2012年・

表1 マリン&レクリエーション実習の概要

	2泊3日	3泊4日
1日目	・入所式	
	・コミュニケーションゲーム	
2日目	・着衣泳	
	・バーベキュー	・キャンプファイヤー(ボンファイヤー)*1*2
	・島内ツアー(自由参加)	
3日目	・朝の集い(講師講話)	
	・マリンプログラム -カヤック -カヌー -ヨット -ウィンドサーフィン	・マリンプログラム -カヤック -ヨット -ウィンドサーフィン
	・火を囲んで	
	・バーベキュー*2	
	・島内ツアー(自由参加)	
4日目	・朝の集い(講師講話)	
	・マリンプログラム -種目の自由選択	・カヌートリップ*1
	・振り返り	・野外料理(カートンドック)*1
	・退所式	・火を囲んで
4日目	・島内ツアー(自由参加)*1	
	・朝の集い(講師講話)	
	・余島散策*1	
	・振り返り	
	・退所式	

\*1は、3泊4日に変更したことで新たに追加されたプログラムを示す。

\*2は、事前ガイダンスの際に、学生に実施するか否かの判断を委ねたプログラムを示す。

2013年の参加者を new program group (以下、NPG) として設定した。プログラム日程及びプログラム内容の差異に焦点を当て、マリン参加が学生にもたらす変化を検証する為、マリン参加前の事前調査(以下、pre)、及び参加後の事後調査(以下、post)の2回の調査を参加した学生全員に実施した。

データ収集に関する詳細は、下記の通りである。

- ・pre: 2009年度～2013年度のマリンに参加した137名に対し、毎年、実習地に向かう車中にて質問紙を配布。回答後、その場で回収を行った。
- ・post: 2009年度～2013年度のマリンに参加した137名に対し、毎年、最後のプログラムである振り返りの最後にpre時と同様の質問紙を配布。回答後、その場で回収を行った。

pre・post共に、質問紙の回答には他者の意見への同調や、過去の自身の回答を想起することなく、回答時の自身の率直な意見を反映するように促した。有効標本については、自己概念の測定に用いた自己成長性検査31項目(公益社団法人日本キャンプ協会、2006)を、pre・post共に全て回答している124名(90.5%)のデータを採用することとした。

### 4.3 調査内容

表2は、本研究で用いた質問項目である。個人特性として、学内での所属、現在の運動・スポーツ習慣、過去の運動・スポーツ活動経験、過去の野外活動経験、運動・スポーツ活動に対する嗜好、野外活動に対する嗜好を設定した。学生の自己概念の変容の測定には、自己成長性検査31項目を設定した。この尺度は、自己形成ないし自己実現に関する態度や意欲に関する自己意識(梶田、1988)を測定しており、自己概念を測定する尺度として

表 2 調査項目

<b>【個人特性項目】</b>	
①学内での所属(短期大学/4年制大学)	②現在の運動・スポーツ習慣
③過去の運動・スポーツ活動経験	④過去の野外活動経験
⑤運動・スポーツ活動に対する嗜好	⑥野外活動に対する嗜好
<b>【自己成長性検査31項目(公益社団法人日本キャン協会, 2006)】</b>	
<b>達成動機(8項目)</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・私は自分の能力を最大限に伸ばせるよう、いろいろなことをやってみたい</li> <li>・私は他の人にはやれないようなことをやり遂げたい</li> <li>・私は将来、立派な仕事をしたい</li> <li>・私は将来、他の人から尊敬されるような人間になるだろうと思う</li> <li>・私は自分の理想に向かってたえず向上していきたい</li> <li>・私は新しいことや違うことをいろいろしてみたい</li> <li>・私は自分の主張を通す方である</li> <li>・私は他の人に比べて能力などが優れていると思う*1</li> </ul>	
<b>努力主義(9項目)</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・私は一度自分で決めたことは途中で嫌になってもやり通すよう努力する</li> <li>・私は他の人に認められなくても、自分の目標にむかって努力したい</li> <li>・私はなんでも手がけたことには最善を尽くしたい</li> <li>・私は現在の自分が幸福だと思う</li> <li>・私は努力さえすれば成績は良くなると思う</li> <li>・私はチャンスを見逃さなければ、能力のある人は偉くなれると思う*2</li> <li>・私は人の一生は案外偶然の出来事で決まるものだと思う*2</li> <li>・私は人とうまくつき合っていける方である</li> <li>・私はどんな不幸に出合ってもくじけないだろうと思う</li> </ul>	
<b>自信と自己受容(8項目)</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・私は勉強や運動について自信を持っている方である</li> <li>・私は自分を頼りないと思うことがよくある*2</li> <li>・私は今のままの自分ではいけないと思うことがよくある*2</li> <li>・私は現在の自分に満足している</li> <li>・私はときどき自分自身が嫌になる時がある*2</li> <li>・私は人より劣っているのではないかと思うことがよくある*2</li> <li>・私は他の人をとてもうらやましく思うことがよくある*1*2</li> <li>・私は他の人に比べて能力などが優れていると思う*1</li> </ul>	
<b>他者のまなざしの意識(8項目)</b>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・私は他の人からどんな噂をされているのか気になる方である</li> <li>・私は自分が少しでも人から良く見られたいと思うことが多い</li> <li>・私は小さいことをよくよと考えることが多い</li> <li>・私は何かをしようとする時、他の人が反対するのではないかと心配になる</li> <li>・私は自分の心が傷つくようなことを恐れている</li> <li>・私は「あんなことをしなければよかった」と悔やむことが多い</li> <li>・私は他の人をとてもうらやましく思うことがよくある*1</li> <li>・私は人からばかにされたりすることに我慢できない</li> </ul>	
<p style="text-align: right;">自己成長性検査31項目については、「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」の5段階評定尺度で回答を求めた。</p>	
<p>*1は、他の下位尺度と重複している項目を示す。 *2は、逆転項目を示す。</p>	

は一般的に用いられることが多い(築山・神野・田中, 2008)。自己成長性検査は、達成動機(8項目)、努力主義(9項目)、自信と自己受容(8項目)、他者のまなざしの意識(8項目)で構成されている。pre・post共に、「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの5段階評定尺度で回答を求めた。

なお、本調査は無記名での回答であり、得られた回答は全て統合されて統計処理にかけられる為、特定の個人を抽出して公開されることは無いとの記載を質問紙の冒頭に加えた。

#### 4. 4 分析方法

分析は、以下の手順で行った。本研究はプログラムの差異に焦点を当てる為、2泊3日で開講されていた2009年度～2011年度の参加者をOPG、3泊4日で開講した2012年度・

2013年度の参加者をNPGと設定した。初めに、個人的特性について分析を行った。学内での所属、現在の運動・スポーツ活動の実施状況、過去の継続的な運動・スポーツ活動の経験、過去の野外活動経験、運動・スポーツ活動に対する嗜好、野外活動に対する嗜好についてカイ2乗検定を行った。

続いて、学生の自己概念の変容について比較検討を行った。自己成長性検査31項目全てで自己概念を構成していると仮定していることから、31項目での合成変数を算出し、pre・postそれぞれにおいて信頼性分析を行った。次に、合成変数の平均値の差の検定について、二要因の分散分析(混合計画)を行った。また、自己概念を構成する下位概念毎の変化を明らかにする為に、達成動機8項目、努力主義9項目、自信と自己受容8項目、他者のまなごしの意識8項目に分類して信頼性分析を行った後に、各要因において合成変数を算出し、合成変数の平均値の差の検定について、二要因分散分析(混合計画)を行った。

なお、本研究で行う検定は有意確率を5%に設定し、分析を行った。

## 5. 結果

### 5.1 対象者の特性

表3は対象者の特性を示したものである。学内での所属では、OPGとNPGの間で統計的に有意な違いが認められた( $\chi^2=6.43$ , d.f.=1,  $p<.01$ )。OPGでは四年制大学の学生が多く、NPGでは短期大学所属の学生が多い結果であった。現在の運動・スポーツ活動の実施状況、過去の運動・スポーツ活動経験では統計的に有意な違いは認められず、OPG、NPG共に80%以上の者は過去に何らかの運動・スポーツ活動を行っていたが、現在は継続的な運動・スポーツ活動は行っていない者が過半数を占める。また、有意な違いは認められなかったが、OPG、NPG共に半数以上の者が過去に野外活動経験を有している結果であった。野外活動に対する嗜好では、OPGとNPGの間で統計的に有意な違いが認められた( $\chi^2=7.80$ , d.f.=3,  $p<.05$ )。共に80%以上(「どちらかといえば好き」と「好き」の合計)の者が好意的な意見であるが、「好き」と明確な意思表示をした者がOPGでは58.8%と、

表3 対象者の特性

所属	OPG	NPG		過去の野外活動経験		
	(n=68)	(n=56)		(n=66)	(n=55)	
短期大学	29.4	51.8	$\chi^2=6.43$ , d.f.=1, $p<.01$	ある	57.6	52.7
四年制大学	70.6	48.2		ない	42.4	47.3
合計	100.0	100.0		合計	100.0	100.0
現在の運動・スポーツ活動の実施状況	OPG	NPG		運動・スポーツ活動に対する嗜好		
	(n=68)	(n=56)		(n=66)	(n=55)	
週3日以上	7.4	3.8	$\chi^2=1.89$ , d.f.=4, n.s.	好き	58.8	57.1
週1日～2日程度	19.1	13.2		どちらかといえば好き	27.9	26.8
月1日～2日程度	19.1	22.6	$\chi^2=0.60$ , d.f.=3, n.s.	どちらかといえば嫌い	11.8	12.5
年に数回程度	23.5	22.6		嫌い	1.5	3.6
全くやらない	30.9	37.7		合計	100.0	100.0
合計	100.0	100.0		野外活動に対する嗜好		
過去の継続的な運動・スポーツ実施経験	OPG	NPG		(n=68)	(n=56)	
	(n=67)	(n=56)		好き	58.8	
ある	86.6	82.1	$\chi^2=7.80$ , d.f.=3, $p<.05$	どちらかといえば好き	32.4	50.0
ない	13.4	17.9		どちらかといえば嫌い	7.4	14.3
合計	100.0	100.0		嫌い	1.5	1.8
				合計	100.0	100.0

NPGの33.9%を大きく上回る結果であった。また、否定的な意見（「どちらかといえば嫌い」と「嫌い」の合計）を示した者がOPGでは8.9%であるのに対し、NPGでは16.1%と、NPGの方が多い結果であった。

概観すると、OPGは4年制大学所属の学生が多く、野外活動に対しても好意的な態度を示しているのに対し、NPGは短期大学所属の学生が多く、野外活動に対して多くの学生は好意的であるが、2割弱の学生が否定的な態度であることが理解できる。

## 5.2 自己概念および下位尺度の構成

表4は自己概念および下位尺度の構成と信頼性分析の結果を示したものである。自己概念の測定に用いた自己成長性検査31項目の信頼性を検討する為、pre、postそれぞれにおいて信頼性分析を行った。結果、pre、post共にクロンバックのアルファ係数が.79を示し、比較的安定した構成となっており、信頼性を得ることができた。

次に、各下位尺度の信頼性を検討する為、同様にpre、postそれぞれにおいて信頼性分

表4 自己概念尺度とその下位尺度の信頼性係数

		Cronbach's $\alpha$	
		pre	post
自己概念		.79	.79
	下位尺度	pre	post
	達成動機	.72	.74
	努力主義	.62	.63
	自信と自己受容	.71	.64
	他者のまなざしの意識	.84	.83

\*1は、他の下位尺度と重複している項目を示す。 \*2は、逆転項目を示す。

析を行った。結果として、努力主義において pre で .62、post で .63 と低い値を示したが、尺度を再検討する一つの目安である .50 (小塩, 2005) を十分に上回っていること、また、過去の同様の先行研究においても一定の信頼性が認められていることから、本研究において再検討の必要は無いと判断し、以後の分析に用いることとした。

### 5.3 プログラム差異による自己概念の pre・post 比較

自己概念を測定する自己成長性検査 31 項目、ならびに下位尺度 4 因子 (達成動機、努力主義、自信と自己受容、他者のまなごしの意識) をそれぞれ従属変数とする群 (OPG・NPG) × 測定時期 (pre・post) の二要因分散分析 (混合計画) を行った。なお、群と測定時期に交互作用が認められた場合に、Bonferroni 法による多重比較検定を行う。

図 1 は、自己概念の変容を示したものである。得点の幅は 37 点から 161 点である。結果、群と測定時期の有意な交互作用は認められなかった ( $F(1,122) = 0.49, n.s.$ )。しかし、群の主効果 ( $F(1,122) = 5.14, p < .05$ ) および測定時期の主効果 ( $F(1,122) = 6.49, p < .01$ ) が認められ、NPG の自己概念得点は pre よりも post の方が有意に高く、更に OPG よりも有意に自己概念得点が高いことが示された。

図 2 は、下位尺度である達成動機の変容を示したものである。得点の幅は 8 点から 40 点である。達成動機とは、目的を達成する上でのモチベーションの役割を担う (公益社団法人日本キャンプ協会, 2006)。結果として、群と測定時期の有意な交互作用は認められなかった ( $F(1,122) = 0.11, n.s.$ )。また、群の主効果も認められなかったが ( $F(1,122) = 0.03, n.s.$ )、測定期間の主効果は認められ ( $F(1,122) = 5.01, p < .05$ )、マリンを経て、参加者の達成動機は有意に向上することが示された。

図 3 は、下位尺度である努力主義の変容を示したものである。得点幅は、9 点から 45 点である。努力主義は、達成動機を基盤とした行動の基本的規範、自己統制の態度を示す概念である。つまり、目標達成に向けた姿勢や意志に関する項目で構成されている (公益社団法人日本キャンプ協会, 2006)。結果、達成動機と同様に、群と測定時期の交互作用は認められず ( $F(1,122) = 0.50, n.s.$ )、群の主効果も認められなかった ( $F(1,122) = 0.47, n.s.$ )。しかし、測定時期の主効果は認められ ( $F(1,122) = 21.81, p < .001$ )、マリンを経て、参加者の努力主義は有意に向上することが示された。

図 4 は、自信と自己受容の変容を示したものである。この自信と自己受容の得点幅は、12 点から 36 点である。自信と自己受容は、課題解決に対する自信や自己認識に関連しており、達成動機や努力主義を基盤的に支える概念である (公益社団法人日本キャンプ協会, 2006)。結果、群と測定時期の交互作用を示したものの統計的には有意ではなく ( $F(1,122) = 0.60, n.s.$ )、群の主効果 ( $F(1,122) = 0.01, n.s.$ )、測定時期の主効果 ( $F(1,122) = 2.37, n.s.$ ) 共に認められなかった。

図 5 は、他者のまなごしの意識の変容を示したものである。この他者のまなごしの意識の得点幅は、8 点から 40 点である。他者のまなごしの意識は、他者の自分自身に対する評価や関係性に関する項目で構成されており、自信と自己受容と同様、達成動機や努力主



義を基盤的に支える概念である（公益社団法人日本キャンプ協会，2006）。結果、この因子においても群と測定時期の交互作用は認められなかったが（ $F(1,122) = 0.04, n.s.$ ）、群の主効果が認められた（ $F(1,122) = 9.60, p < .001$ ）。測定期間の主効果は認められず（ $F(1,122) = 1.30, n.s.$ ）、マリンを経験することでの有意な変容は認められなかった。

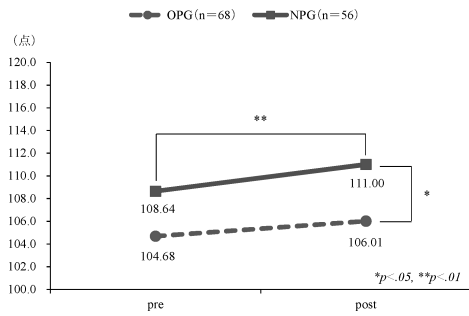


図1 自己概念の二要因分散分析（混合計画）

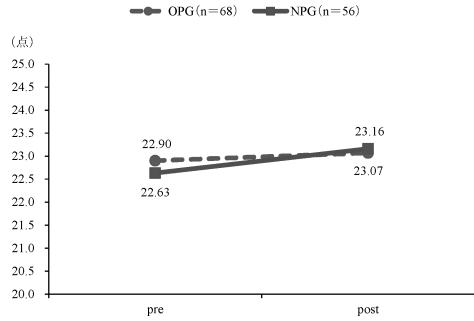


図4 自信と自己受容の二要因分散分析（混合計画）

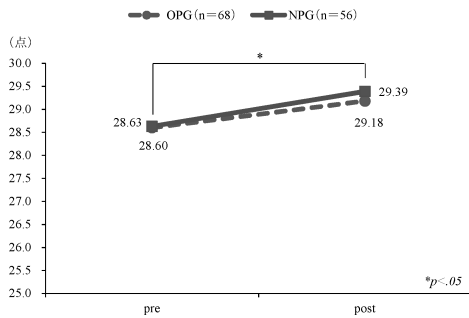


図2 達成動機の二要因分散分析（混合計画）

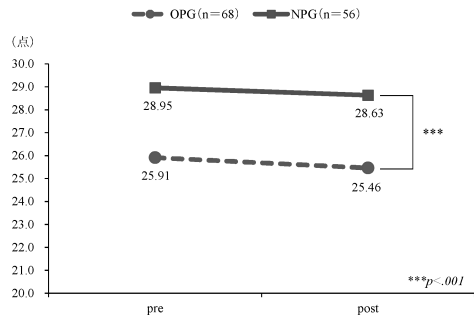


図5 他者のまなざしの意識の二要因分散分析（混合計画）

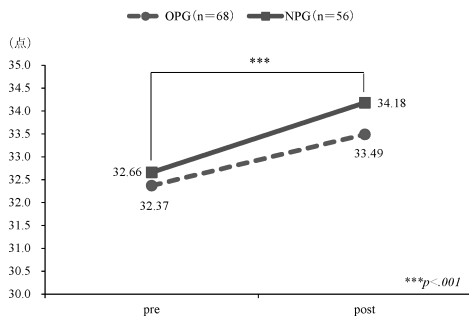


図3 努力主義の二要因分散分析（混合計画）

## 6. 考察

本研究の結果では、マリンを経験することで学生の自己概念は有意な向上を示すことが明らかとなった。また、本研究の視点であるプログラムの差異に焦点を当てた際、2泊3日でのプログラムよりも3泊4日のプログラム内容の方が有意に高い値を示した。しかし

ながら、群と測定時期の有意な交互作用が認められなかったことを考えれば、一概に2泊3日より3泊4日のプログラムの方が良いとは断言できない結果であった。

対象者である学生の個人特性に認められた統計的に有意な違いは、学内所属と野外活動に対する嗜好であった。しかし、野外活動に対して、OPGの方が肯定的な意見を持っている者の割合が有意に多かったことを踏まえれば、プログラム期間における1日の差(3日間と4日間)と、それに伴うプログラム内容の差が少なからずの影響を与えていることが考えられる。

OPGが経験した2泊3日では、満足な活動時間が2日目に限定されている為、3日間を通して非常にタイトなタイムスケジュールであった。その中でたくさんを経験するわけだが、時間的な余裕がない為、プログラム中に経験したことやその場で湧き上がる感情などについてゆっくりと向き合い、振り返る時間が取れていなかったことが考えられる。比べてNPGが経験した3泊4日のプログラムでは、2泊3日のプログラム内容を基に構成されており、ある程度、時間的な切迫感が解消されていたことが考えられる。また、新たな課題解決や協働が求められるプログラムとして「カヌートリップ」や、自分たちで火おこしから行って食事を確保する「カートンドッグ」、また、それらのプログラムをスムーズに遂行できるようなきっかけづくりのプログラムとして、周囲の学生やスタッフとのアイスブレイク、及び、4日間の個人目標を設定することを目的に行われる「キャンプファイヤー(ボンファイヤー)」を経験したことが1つの要因として考えられる。予め、初日のキャンプファイヤー(ボンファイヤー)で個人目標を設定していることから、その目標を達成する為の取り組みや、その過程において周囲との関係性の構築が可能となっていたのではないだろうか。下位尺度である達成動機や努力主義に見られるpreからpostにかけてのポイント上昇率の差異は、群の主効果が認められなかったものの、これらに影響を受けていることが考えられる。また、自信と自己受容において、有意な交互作用が認められなかったものの、OPGよりもNPGが高いポイント上昇率を示していることを考えれば、課題解決や協働がプログラムを無事に終えることで、「やればできる自分」という明確な結果を認識できたことや、多くの学生が振り返りシートの記述にも記していたように、ボンファイヤー時に設定した個人目標が達成できたことが影響していたことが示唆される。それに伴い、達成動機や努力主義の有意な向上を促したのではないだろうか。

以上のように、2泊3日では経験できないプログラムや、それらをゆっくりと振り返り、自身と向き合う時間が取れるだけのタイムスケジュールの確保が、自己概念の統計的な有意差に表れたのではないかと考える。また、NPGが経験し、OPGが経験していないという差異においては、マリンをサポートする周囲のスタッフの違いを指摘しておかなければならない。

NPGが経験したマリンでは、2012年度・2013年度共に、在学中にマリンを経験した卒業生との交流があった。2012年度では、本学卒業生(2009年度マリン参加者)が余島のボランティアスタッフとしてマリンをサポートし、参加学生の前でも話をする機会(朝の集い)を設けた。また、2013年度のマリンにおいても、神戸YMCAへ就職した本学卒業

生（2009年度マリン参加者）がマリンプログラムの指導スタッフとしてサポートに入り、2012年度と同様に学生の前で話をする機会を設けた（朝の集い・ボンファイヤー）。これらのことは、身近な存在であるOGの話聞き、実際に社会人として活動している姿を見ることで、今の自分と向き合う大きなきっかけとなっていることが考えられる。これらの新たな取り組みも、3泊4日へ変更したことによる時間的な余裕が可能にしたものである。

ここまで、自己概念の変容について考察してきたが、あくまでも、統計分析の結果において群と測定時期の交互作用が認められたわけではなく、3泊4日の有意性が示されていない。このことを踏まえれば、今後は「どのようなプログラムが、学生の自己概念の変容にどれだけの影響を示すのか？」を把握できるような研究フレームが必要であり、プログラム毎での評価も必要であろう。

## 7. 結論

本研究の目的は、プログラムの差異による自己概念の変容に焦点を当てることでマリンのプログラム評価を行い、2泊3日から3泊4日へ変更したことについての評価を行うことであった。結果として、以下のことが明らかとなった。

- ・マリンを経験することで、学生の自己概念は有意な向上を示す。また、2泊3日のプログラム参加学生よりも3泊4日のプログラム参加学生の方が有意に高い値を示す。
- ・群（OPG・NPG）と測定時期（pre・post）の交互作用は認められず、プログラム内容の差異（期間と内容）の影響は認められなかった。

以上のように、マリンの経験が学生の自己概念を有意に向上させることが明らかとなったものの、2泊3日から3泊4日に変更したことの有効性を示すまでには至らなかった。

本学は、運動やスポーツ、野外活動についての学問を修める大学ではなく、本授業もあくまでも教養科目のひとつとして開講されている。感覚的には、自然という非日常的な空間では、普段とは異なる気づきがあり、その気づきは、一人の大人として社会へ出ていく前に得ておくべき重要な要素であることを理解することは難しくない。しかし、実際に見える形での気づきというものを示すことができれば、本科目が開講される意味も共有しやすいのではないだろうか。筆者らは、これまで取り組んできた一連の研究と同様、気づきの獲得を客観的な指標を用いて明らかにすることで、大学における本科目の価値を示していくことが一つの役割であると考えている。

今後も、学生にとってよりよい授業を展開できるよう、研究活動を通じてデータを蓄積し、有効的に活用していけるよう取り組んでいきたい。

## 8. 引用文献

- 井澤悠樹・松永敬子（2009）“マリン&レクリエーション実習のプログラム効果に関する研究 - 学生の Self-efficacy に注目して -”『大阪女学院大学紀要』第6号, pp97-106.
- 井澤悠樹・松永敬子（2010）“マリン&レクリエーション実習のプログラム評価に関する事例研究 - 女子大学生の自己概念の変化に焦点を当てて -”『Leisure & Recreation（自由時間研究）』Vol.37, pp101-110.
- 井澤悠樹・松永敬子（2011）“マリン&レクリエーション実習のプログラム評価に関する事例研究 - 自己概念の変化とプログラム満足度による少人数プログラムの検討 -”『大阪女学院大学紀要』第8号, pp215-226.
- 井澤悠樹・松永敬子（2012）“マリン&レクリエーション実習のプログラム評価に関する研究 - 自己概念の変化と横断比較による評価 -”『大阪女学院大学紀要』第9号, pp79-93.
- 影山義光・飯田稔（1988）“大学キャンプ女子参加者に対する因子分析を用いた自己概念の変容”『筑波大学体育科学系紀要』第11巻, pp139-144.
- 影山義光・布目靖則（2001）“大学キャンプ授業の参加学生の自己概念と孤独感の変化”『野外教育研究』Vol.5(1), pp49-59.
- 梶田叡一（1988）『自己意識の心理学 第2版』東京都, 東京大学出版.
- 小塩真司（2005）『SPSS と Amos による心理・調査データ解析-因子分析・共分散構造分析まで』東京都, 東京図書株式会社.
- 公益社団法人日本キャンプ協会調査研究委員会（2006）『キャンプのものさし - 野外教育活動を評価するための尺度集 -』東京都, 公益社団法人日本キャンプ協会.
- 小学館『大辞泉』編集部（松村明監修）（1995）『大辞泉』東京都, 株式会社小学館.
- 小学館ランダムハウス英和大辞典編集委員会（1984）『小学館ランダムハウス英和大辞典』東京都, 株式会社小学館.
- 尚学図書編集（1988）『国語大辞典（新装版）』東京都, 株式会社小学館.
- 橘直隆・平野吉直・関根章文（2003）“長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響”『野外教育研究』Vol.6(2), pp45-56.
- 築山泰典・神野賢治・田中忠道（2008）“大学キャンプ実習が「社会人基礎力」に及ぼす有効性の検討”『福岡大学スポーツ科学研究』Vol.39, pp13-26.
- 上瀬由美子（堀洋道他編著）（2000）『心理尺度ファイル』東京都, 垣内出版.